夏

そのまま忘れ去ることは難しい
暑い夏

夕刊を配り、通り過ぎるバイクの音
扇風機が空気をかき回す連続音

いかに寂しく、切なくとも
涙にはならない美しさとなる季節

いつの間にやって来たのか
いつからそこに座っているのか

「まあ、一杯、どうです」
キュウリとワカメの酢の物を用意して

おどけた顔をして鎮座し何も語らないまま
何を見ているのか、素通りしているのか

「どこへお出かけでしたか」と尋ねると
ふいに胸の奥で小さな灯が点った

束の間、ひとりであるということ
生命とは、もともとそのようなもの

遠くで子供たちが叫んでいる
セミの声々と競い合うかのように

目眩が誘う眠りの奥深くで
泥濘にはまるかのようにもがいている———

私は貪り食おうとしてみたが
それはいつも中断を余儀なくされた

幻覚に過ぎない季節だ
お前と言うやつは

(2012.7.29)